

ベルギーにおける平和教育の実践

前ブラッセル日本人学校補習授業校 校長

長崎県佐世保市立相浦西小学校 校長 佐 藤 博

キーワード 在外教育施設、ブラッセル、補習校、平和教育

赴任校の概要

ブラッセル日本人学校補習授業校

The Japanese Saturday School of Brussels

URL : <https://www.japanese-school-brussels.be/blank-3>

1 はじめに

2022年2月、派遣先も決まり、期待と不安の中であわただしく派遣準備を行っているところ突然流れてきた驚きのニュース、ロシアによる「ウクライナ侵攻」である。多くの人が数ヶ月で収まるのではないかと、との予測をしていたのだが、結局、派遣期間中の2025年の3月まで終わることが無く、残念ながら今でも多くのウクライナの人々が戦争の被害で苦しんでいる。

私が派遣されたベルギーはウクライナと同じヨーロッパに位置しており、また首都ブリュッセルにはEUやNATOの本部もあるため、多くの人々がこの戦争に関心を持っていた。住民の中にはウクライナから移住したという方も多く、市内のアパートには、ウクライナの支持表明なのか、青と黄色の国旗が掲げられているところが所々に見られていた。子どもたちの関心も高く、日本人学校の中でも会話の中でこの戦争について話す光景も見られた。また、ベルギーだけではなくヨーロッパ全体でも戦争や平和に対する意識は高く、長崎に原爆が投下された8月9日には「ユーロニュース」という番組で右のようなニュースが流されることもあった。

さらに私自身も長崎県からの派遣ということもあり、平和教育を充実させていきたいという思いも強かった。特に補習校の子ども達は日本から遠く離れた国で過ごしているため、日本人として戦争に向き合う機会がほとんどない。そのような子どもたちに補習校でどのような平和教育を行ってきたのか、その取り組みを紹介する。



8月9日のベルギーのテレビ番組より

2 補習校で実践した平和教育

(1) 年間カリキュラムに位置付けられた国語教材

ブラッセル日本人学校補習授業校では、光村図書の教科書を使用しており、この教科書には戦争を題材としたいわゆる「平和教材」も多く取り入れられている。それらの単元の1時間を使い、教科書の内容とからめながら平和教育を実施するようにした。例えば小5で学ぶ「たずねびと」(朽木梓 作)では、広島に原爆投下後の街の様子が描かれていたため、長崎の様子を例に出しながら当時の悲惨さを伝え、戦争を二度とてはいけないという気持ちを高めるようにした。

ただ補習校は様々な親がいて、ブラッセル日本人学校補習校も6割から7割が国際児という状況である。親の国籍も様々であるため、「対アメリカ」のような伝え方をしないよう、国の名前は出さずに「どこの国であっても戦争をするのはよくない」という伝え方をするように気を付けた。

さらにベルギー国内の学校では、小学校の高学年になるまでは、平和教育を受けていない学校が多いとの話を事前に聞いていたため、使用する言葉や写真は極力気を付けるように心がけた。特に子どもによっては、「死」という言葉に敏感に反応する子も見られたため、日本で指導するとき以上に言葉に気を付けながら指導を行った。

(2) 授業後の子どもたちの様子について

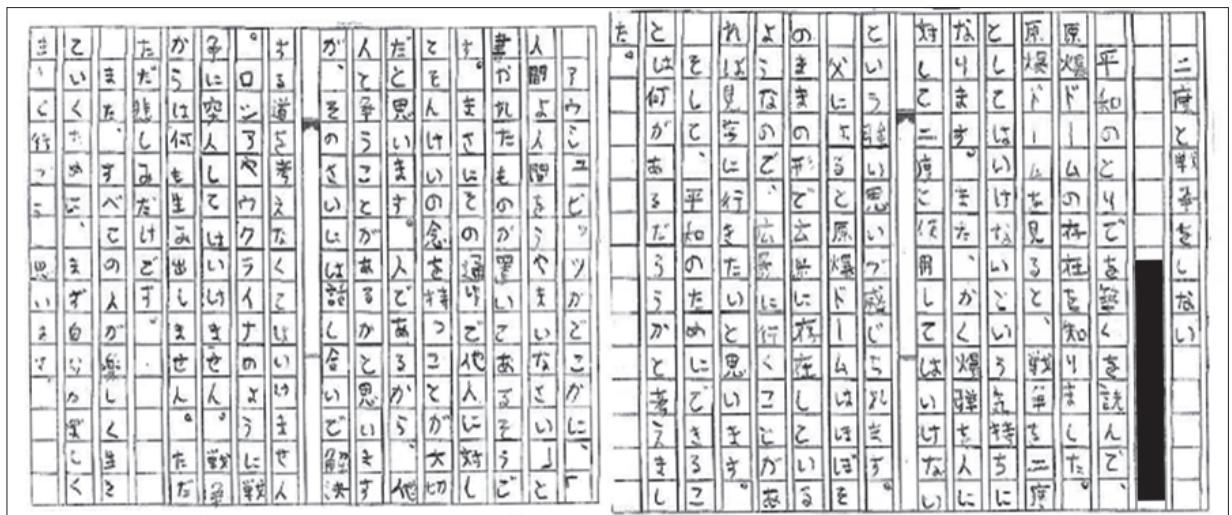
どの学年の子どもたちも、一生懸命、また大変興味深く話を聞いていたのが印象的であった。ここでは、現地のニュース番組等で、ウクライナ戦争について多く報道されており、「戦争」に対する関心も非常に高まっているようである。ただ小学3年生「ちいちゃんのかげおくり」(あまんきみこ 作)で、ちいちゃんのお父さんが戦争で亡くなったことを伝えた際には、「お父さんが死ぬなんて言わないで」と泣き出す子もいて、日本のように発達段階に応じた平和教育を受けていない子どもたちに戦争の悲惨さをどのように伝えるべきなのか非常に迷った。



オスロで行われたノーベル平和賞受賞式

また、戦争の被害だけでなく、例えば長崎県が世界の核廃絶に向けてどのような取り組みを行っているのかも伝えるようにした。ちょうどタイムリーにも、2024年のノーベル平和賞を日本被団協が受賞することとなったため、被団協の方々の思いや高校生1万人署名運動の意義なども伝えながら話をした。戦争や原爆の被害については、恐ろしさのあまり目を背けていた子どもたちも、被団協の話には興味があったようで、一生懸命聞いてくれていた。

また、下は補習校6年児童の授業後に書いた作文である。現地の学校で学んだアウシュビッツのことと関連付けながら、平和への思いについて述べている。この子以外にも、多くの子が平和の大切さについての思いを感想の中で書いてくれていた。日本とベルギー、場所は違っても平和を願う気持ちはどこも同じなのだと改めて感じた。そして過去の過ちに触れながら、これからの平和な世の中について考える機会を与えることは、我々教育者としての大切な使命なのではないかと強く感じた。



授業後の感想から(小六児童)

3 現地の学校で行われている平和教育

(1) 小学部で行われる平和教育

ブリュッセル市内の小学校では、日本のように学習指導要領で一律に定められたものではなくそれぞれの学校に任せられているのがほとんどのこと。中でも市内の大きな公園に隣接する「軍事博物館」見学が最も多く、私も休みを見つけて行ってみたのだが日曜日でもボーイスカウトの団体等で混雑していた。その軍事博物館では主に第一次世界大戦から第二次世界大戦の様子を写真や実物資料で紹介していた。

日本の戦争についても触れてあり、特に長崎では非常に有名な「焼き場に立つ少年」の写真が大きく展示してあって、ベルギーでも日本の戦争や原爆に対して関心が高いことが窺われた。

(2) 中学部で行われる平和教育

小学校高学年から中学部にかけて、ベルギーではドイツのユダヤ人収容所について学ぶところが多いとのこと。例えばアントワープ地方にある「ブレンドンク収容所」である。ここはナチスドイツ軍が1940年に、ベルギーを侵略したのちに収容所として使用したそうで、多い時には3500人ものユダヤ人やベルギー人が収容されていたそうである。このような場所には常にガイドスタッフがいて、子どもたちにもわかりやすく戦争の悲惨さを伝えてくださっているとのこと。日本だけでなく、ベルギーでも平和活動をしている方がたくさんいて非常にうれしく感じた。

また、中学校ではこのような見学だけではなく、討論型の平和学習をよく行っているとのこと。例えば「戦争を回避して平和を維持するにはどのような方法があったのか」といった議題を出し、話し合いながら平和の大切さを感じさせようということである。こういった対話型の学習はベルギーで頻繁に行われており、平和学習以外にも、人権や平等についても対話から考えを深めていくことが多いそうである。

実際にベルギーにはたくさんの人種が一緒に生活しており、私も日本人ではあることが周りはさほど意識もしていないようで、そのことが居心地の良さに繋がっているところもある。そういったところもマイノリティを認め、進んで受け入れてきた文化・教育の成果なのかもしれない。

4 ウクライナ人学校補習校を訪ねて

2023年の冬、ある人を通してブリュッセル市内にあるウクライナ人学校補習校を見学させてもらった。校長先生とも話をする機会があったのだが、まず驚いたことが学校の児童生徒数が把握できず困っていたこと。これはこの時期、戦争が始まって10か月を過ぎようとした頃でもあり、ウクライナからの避難民が毎週増え続けて、正確な人数が学校で把握できないという理由からである。戦争が始まって国内はきっと大混乱していたに違いない。

ただ、ここで出会ったウクライナ人の子どもたちは、日本人学校の子どもたちと何も変わらず、みんな楽しそうに学習に取り組んでいた。私が日本人だとわかると、さっそく「ポケモン」の話をしてくるなど、避難してきたとは思えないくらい明るい子どもたちであった。

しかし、玄関のところに飾ってあるクリスマスツリーを見て、言葉を失ってしまった。ツリーの根元においてあるのはプレゼントではなく、大きな袋に入ったジャガイモが…校長先生に尋ねてみたところ、子どもたち



ベルギーにあるウクライナ人学校補習校



ジャガイモのクリスマスプレゼント

が「戦地で戦っている兵隊さんたちにおなかいっぱい食べてほしい」と、それぞれの家から持ってきたそうである。日本の戦時中を思い起こさせるようでぞっとした。

また同じフロアーに飾られていたクリスマスカードも兵隊さんに向けたメッセージが…80年前の日本でも同じようなことが行われていたが、またここでも同じ悲しみが生まれるのではないかと思い、本当に胸が苦しくなった。このような悲劇を繰り返さないためにも、教育の役割は大きいと思う。



兵隊さんに向けたクリスマスカード

5 おわりに

2025年の冬、ノーベル平和賞に日本被団協が選ばれ、私が長崎から派遣されていることを知っている何人かのベルギーの方から「おめでとう」と祝福された。

ただ、今、被団協にこうやってスポットがあてられていることに對し恐怖を感じている人も少なくなかった。もしかしたら核戦争が目前まで迫っているのかもしれない。

80年前の過ちを繰り返さないためにも、教育が果たしていく役割は非常に大きいと思う。長崎で教員をしている頃は当たり前のように原爆の悲惨さを子どもに教え、本年度も8月9日は土曜日であったが県内一斉の登校日に指定し、みんなで戦争の悲惨さを学ぶとともに、11時2分には全員で黙祷を行った。このような取り組みこそが子どもたちの心に平和を愛する思いを根付かせることになると思っています。

その思いはもちろんベルギーでも変わらず、戦争が起きないような平和な世の中をつくっていくためには、教育こそ唯一の手段と信じている。過去の過ちから学び、ではどうすればよかったのか考えさせることで、平和な世の中が維持できると信じている。

自分の事だけ、自国の事だけを考えるのではなく、他者を理解して思いやりのある世界にしていくなために教育が果たす役割は大きい。日本の子が、ベルギーの子が、そしてウクライナをはじめとする世界中の子が笑顔で過ごせる世の中にするためにも、これからも平和の大切さを子どもたちにしっかり伝えていきたいと思う。